

万行寺寺報

Mangyoji Jihō

発行 浄土真宗本願寺派 万行寺
住職 山崎信充
〒385-0003
長野県佐久市下平尾4 6 1-1
電話 0267-67-2460

2023(令和5)年

仏暦2566年

6月号

(第141号)

実践運動 総合テーマ『そとつながる ホツがつたわる～結ぶ絆から、広がるご縁へ～』



住職 法話

あなたの国を照らします

正信念仏偈に学ぶ
普放無量無辺光
無碍無对光炎王
あまねく無量・無辺光、
碍・無对・光炎王

【現代語訳】
本願を成就された仏は、
無量光・無辺光・無碍光・
無对光・炎王光

無量寿仏の威神光明は、最尊第一なり。諸仏の光明、及ぶことあたはざるところなり。

【現代語訳】

無量寿仏の神々しい光明はもつとも尊いものであつて、他の仏がたの光明のとうてい及ぶところではない。

これは『無量寿経』の中にあります。諸々の仏さまはみな光明を放つて衆生を救うが、その中でも阿弥陀仏の光明は「最尊第一」と言われ、他のどんな仏よりも優れていると説かれています。そし

て、阿弥陀仏の十二の光明(十二光)の働きをあげられます。先ず、その前半の五つがあげられていきます。無量光(量り知れないつきることのない光明)無辺光(あらゆる世界を照らす限らない光明)無碍光(何ものにも妨げられない光明)無对光(比べるもののない光明)炎王光(炎のように威力が大きく優れている光明)

「光」はあらゆるところに等しく届くという性質を、仏さまの働きに譬えています。苦しみ悩む私たちの内面にあつてくたさるという事です。ここ最近も、自ら死を選んではしまふという自死の葬儀にあいました。まだこれからという若者が、大切ないのちを自ら絶つてしまふのは大変残念でなりません。死を選んではしまふほどの苦しみの内は本人にしかわかりません。しかし、今さら後の祭りとなつてしまひますが、立ち止まつて仏さまの光あふれる教えにふれて欲しかったと悔みながら葬儀のお勤めをしています。遺された親御様の苦しきも量り知れないものがありますが、ご縁頂くもの皆に苦しみを残すものであります。正信念仏偈を訳した『和訳正信偈』があります。その中には「十二のひかり放ちては、あなたの国を照らします」とあります。全ての生きとし生けるものがこの光に照らされ、阿弥陀仏の働きに出遇う慶びが詠まれていきます。ここであげられている十二光そのものの意味を知ること、それほど重要ではありません。大切なのは、その光に出遇つて、その働き(救い)を自身に受けることが重要なのです。私も、仏教は実践が大事であると感ずることが多くなつてきました。奥深い意味を知つても大切ですが、身をもつて仏さまの働きを感じられる実践が大事なのでしよう。

浄土真宗 新 仏事のイロハ

三、お墓と納骨

―亡き人を偲ぶ縁として―

「阿弥陀仏の救い」

水子を救うのはお地藏さま？

生後まもなく亡くなった赤ちゃんの遺骨をお墓に納めるというので、お参りに行きました。

墓地は最近求められたようで、石碑は建っていませんでしたが、右端のところにお地藏さまが建てられています。

「ああ、これが水子地藏だな」と思いながら、どうして地藏尊を建てたのかを聞くと「水子の場合はお地藏さんが救ってくださるそうなんです。だから地藏尊を建てて、その下に赤ちゃんの骨を納めようと思います。もちろん、大人が死んだら中央に石碑を建てるともりですが」とのこと。これでは「水子は地藏尊に



大人は阿弥陀仏に」と、まるで救いに「分業」があるかのようです。しかし大切なことは、救われなければならぬのは他ならぬ「私自身」であると感じづくことでしょう。赤ちゃんを亡くして悲しみにくれる私をしっかりと抱きとめ、人生を真実に向かわしめてくださる方に出遇うことが大切なのです。

阿弥陀さまは正しくそうした方です。「苦悩する一切の生きとし生けるものを必ず救いとる」と誓われた仏さまです。そのご本願を「私のために」と味わい信じて生きるのが浄土真宗の門徒と言えましょう。

その心境からは「地藏尊を建てて礼拝しよう」という発想は湧いてこないはずですが、また、そうすることは阿弥陀さまの救いを疑うことにもなっています。

「だが赤ちゃん自身はどうなるんだ」と心配する人があられるかもしれません。その人は「赤ちゃんのために、水子地藏やお墓を建てるものと思っ

ているのでしよう。しかし、仏さまのご本願を仰いでいくと、その亡き赤ちゃんが実は「私のために」人間に生まれることの有り難さ、いのちの尊さを知らしめ、「この大切な人生を確かな依りどころをもって歩むように」と教えてくださった仏さまであつたと味わえてくるものです。

どうか、水子地藏を建てて大人の骨と区別するのではなく、いのちの尊さをかみしめて仏さまの本願を仰ぎ、お念仏申してください。

「浄土真宗 新 仏事のイロハ」末本弘然著／本願寺出版社刊より

年忌法要表

1周忌	2022(令和 4)年	23回忌	2001(平成13)年
3回忌	2021(令和 3)年	25回忌	1999(平成11)年
7回忌	2017(平成29)年	27回忌	1997(平成 9)年
13回忌	2011(平成23)年	33回忌	1991(平成 3)年
17回忌	2007(平成19)年	50回忌	1974(昭和49)年

編集後記

末本先生の「仏事のイロハ」の内容をそのまま順に載せていますが、偶然にも私の法話とよく重なるようです。今回も「救いに出遇う」ということが重なっています。共にお読み頂き味わってみてください。◆雨が続くの時期になり、災害級の雨が毎年、心配されるようになりました。お気をつけください。